14　矮鶏置物

高村光雲

明治二十二年（一八八九）
木彫
雄：高三二・〇、雌：高二一・〇
二点

サクラ材を用いて、矮鶏を量感豊かに彫り上げた作品で、羽の一枚一枚を丁寧に彫り、鶏冠や足の質感の違いまでを表している。作者の高村光雲（一八五二～一九三四）による丸彫り作品の多くが、像の基台となる部分をともなって彫り上げられているのに対し、本作は基台がない写実を極めた造形が魅力となっている。特に雄の矮鶏については、片足を持ち上げ、捻りのある動きのある体躯を、細い足指や鋭くとがった爪、薄く彫り表された羽の先で支える。雄雌ともに目には別材が象嵌され、白目の部分は透明感のある薄黄色の材で貝材料に近く、黒目の部分は黒檀などの木材かと考えられる。光雲の懐古談によれば、美術商若井兼三郎の依頼により明治二十二年（一八八九）開催のパリ万国博覧会に出品の予定で雄の矮鶏を彫り進めていたが、モデルとなる生きた矮鶏を選ぶのに手間取ったことで、同博覧会への出品期限に間に合わなくなり、その後、周囲の勧めを受けて、同年四月の日本美術協会美術展覧会に本作を出品したという。本作は金賞牌を受賞、また同展に行幸された明治天皇の目にとまり、買い上げとなった。その後まもなく光雲は宮内省の依頼により雌の矮鶏を追加制作し、現在、対の置物として伝えられている。雄の尾羽裏に「高村光雲敬刻」、雌の足裏に「高村光雲敬刀」と刻銘がある。光雲は明治二十三年に帝室技芸員に任命されるが、本作はその評価を確実とした作品の一つである。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

明治美術の一断面――研ぎ澄まされた技と美
三の丸尚蔵館展覧会図録No.82

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成三十年十一月三日発行

© 2018, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan